

が、日教組のいう「人権教育」への意見である。

「人権、人権というが、具体的に人として大切なこととか、どう生きていくとか、家族のあり方といった、徳育を推進しよう」

ところが、橋下知事が反応しない。議事録用にビデオ撮影がされる中、知事はこう言うのだ。

「皆さんの意見はわかるが、徳育はイデオロギーが絡むからやりたくないんです」
 なんか、テレビでの挑発的な発言と違うなあと、空気が戸惑い始めた。

「議事進行役の神谷君が、教育学者・高橋史朗氏の推進する『親学』をやりたい」と言い、家庭教育を充実させるための行政の補助や、地域コミュニティを形成させて、多くの大人たちの目で子供を育てようという提案しました。でも、知事は『できるだけわかりやすいことをしたい。親学はよそでやって下さい』という意見でした」(前出・参加者)

橋下氏の提案はこうだ。「もっと目に見えるわかりやすい校庭の芝生化とか、

数字でわかる学力向上をやる」

すかさず「それはおかしい」という非難があがった。神谷氏が振り返る。

「教育に携わる者が目立つことしかやりたがらないというのは、根本的におかし

小沢氏との面会の予行演習を

大阪府の担当者から芝生化は予算がないと言われ、

学校側からは「メンテナン스가大変」と受け入れられなかったが、神谷氏たちメンバーが学校をまわって校長を説得。芝生化を少しずつ実現させ、「改革」の手応えを感じていった。

一方、その後の会合で橋下知事は、「昼食をとる時間がもったいない。昼食抜きでやりましょう」と、熱意を見せていた。だが、橋下知事の手腕は、やはり有権者の目に見えるわかりやすさに重きが置かれていたのは事実である。その一つが、教員の給与カットだ。

現在、大阪の教員給与は全国でも最低レベルである。そのことで神谷氏は橋

い、会を辞めると言う人も出ました。しかし、大事な初回の会合でいきなり決裂させられないから、進行役の僕が『まあ、まあ』と取りなして、まずは知事が言う芝生化を検討しましょうよ、と収めました」

下知事に抗議したと言う。「財政が苦しいのはわかります。しかし、逆に給与を上げるべき。大阪にいい人材が集まらなくなるからです。元教員として言わせてもらおうと、学校は何人かの熱意のある先生たちが引

張っている。そういう教師を支援する仕組みが必要なんです。ただでさえ足を引く張るダメ教師と横並びなのに、そういう教師と一緒に給料を下げられたら、人は集まりません」

実際、大阪の教育現場を歩くと、教員不足は深刻である。ある公立高の教師が苦笑まじりにこう話す。

「地方では教員の採用が何十倍と狭き門なのに、大阪は二倍強ですよ。レベルが

低くなるのは当然。昨年、小学校の先生に五十九歳の人合格した。新人研修を受けて、そのまま三月には定年退職。ただの思い出づくりか(笑)。こんなありえない採用があるほど、大阪の教育は壊れている」

喫緊に目指すべきは教育的成果なのに、橋下氏は目の政治的成果を求めている印象が否めない。そして、この教育維新は、違う展開を見せ始める。

○九年十二月三日、教育維新の忘年会でのこと。橋下知事はこう提案した。「ここには市長になれる人材が揃っている。皆さん、市長になって下さい。みんなで勉強する市長塾をつくりましょう」

半年前に会のメンバーが松原市長選挙で当選したこともあり、橋下知事には何かが閃いたのだろう。知事はこんな話もしている。

「今度、小沢一郎先生に会うんです。これから小沢先生に質問することを私が述べますから、意見を言ってお下さい。その中に小沢先生が言うような意見があるか

もしれません」

民主党・小沢幹事長(当時)との面会の予行演習をしようというわけだ。何の会か、段々わからなくなってきたが、十二月二十九日の夜には、関西大学大学院を借りて、さっそく市長塾の勉強会が行われた。

「知事から吹田市の予算書を持ってくるように言われたつもりで予算の勉強をしました。この頃、知事はよく『府議はバツ目当てのバカばかりだ。あんな大阪府は解体しなくちゃいけない。ここにいる皆さんの方が、よほど大阪のことを考えている』と絶賛していました」(前出・参加者)

で、一体、教育維新の話はどこにいったのか――。

「その頃、会のメンバーが食育を提案したんです。すぐに知事は『それ、やりましょう!』と乗り出して、『皆さん、年末年始は地元でチラシを作りますよね。そのチラシに僕が食育の原稿を書きます。そうしたら(食育の提唱に)経費がかからないじゃないですか』